

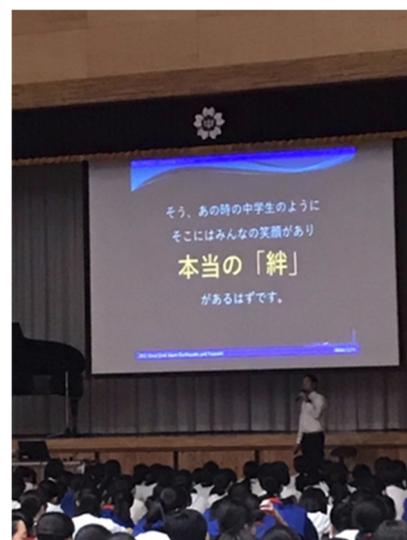
開催地名：長野県長野市	
開催日時	令和元年10月3日（木） 13：30～15：00
開催場所	長野市立櫻ヶ岡中学校
語り部	松本 拓 （福島県いわき市）
参加者	生徒、職員、地域住民 約600名
開催経緯	<p>昨年度、東北大学特任教授齊藤幸男先生を招いて、防災教育講演会を実施した。その中で避難所運営の話もあり、生徒が避難所運営に積極的に関わることが重要であるという話があった。そこで、本校が避難所になったときに、具体的に生徒や職員はどのように動けば良いのか、また、地域の方はどのような活動ができるのかを、具体的な例を示して話ししていただきたく、本日の講演を実施する次第となった。</p>
内容	<p>（1）いわき市内の被害状況</p> <p>東日本大震災によるいわき市の状況は、震度6弱、津波最大高8.57メートル、犠牲者467名。津波は太平洋より市内の河川を遡上して被害を拡大させ、海岸線は60キロメートルに渡り全て壊滅、そして、原子力発電所も壊滅し、震災発生当日の19時03分には第1原発に原子力緊急事態宣言が、翌日3月12日にも第2原発に同じ宣言がそれぞれ出され、人の行き来と物資の市外からの流入が強制遮断となった。その他、断水は約1ヶ月、市内道路は高速道路も含めて隆起、陥没状態、ガソリンスタンドでは車1台20リットルまでの給油制限が断続的に続いた。</p> <p>上記のような凄惨な状況の中、当時、いわき市危機管理課に所属していた私は、震災の翌日、市内指定場所の1つである小名浜第2中学校へ派遣され、避難者約800名の対応に、たった一人で当たることとなった。その時の実際の状況と、この震災から学んだことをそれぞれ説明する。</p> <p>（2）避難所の実際の状況</p> <p>メディアで東日本大震災の状況は沢山取り上げられたが、基本的には視聴者が関心を持つ内容（衝撃的な映像や感動的な話がほとんど）に終始しており、実際の現場における職員たちの苦悩や、どんな問題があったのかは取り上げられなかった。</p> <p>しかも、避難所運営は一度も経験したことがない状態でいきなり大震災の現場に放り込まれ、対応せよという状況だったので、とにかくやれるところから手をつけて行くというスタンスで対応に当たることとした。</p> <p>特に避難者の対応には非常に苦慮し、細かいところまであらゆる対応が求められた。避難生活が長期化すると、「寒さを何とかしろ」であったり、配給されるおにぎりを巡っての避難者同士の醜い争い、毎回同じような食料の配給に対</p>

する不平不満等、本当に人間のいやな部分を多く見せつけられた。初めて人を怖いと感じ、信じるができないと思った瞬間だった。更に、人間というのは極限状態、窮地に立たされると、自分のことしか考えられなくなるということをまざまざと感じた。他の避難所でも同じような状況で、職員の中には精神的に参ってしまい、最終的には避難所へ出てこれなくなってしまう者もいた。

そのような中でも、トイレの問題に関しては想定外の協力者が現れた。それは中学生達で、何も言わずに率先して、プールの水をトイレまで運んでくれた。人の役に立っていることがうれしかったようで、嫌々やるということではなく、本当に一生懸命運んでくれた。この中学生の行動からは、人の優しさを感じることができた。

### (3) この震災から学んだこと

まず、この震災を通して気づいたことは、一人ではできない事も、力を合わせれば乗り越えられるということ。本当にこれに尽きると思う。何日間にも及ぶ避難所の運営を、何とかこなすことができたのは、学校の先生方やその生徒たちの協力であったり、ボランティア、県外、市外からの方々の協力、皆さんの協力があつて、なんとか乗り越えられたことと、ひしひしと感じている。やはり、やってもらおうという受け身の姿勢ではなく、自ら動くという自発の姿勢。争うのではなく、協力することの大切さ。一人のためではなく、みんなのために。そこに本当の絆と言われるものがあるのではないかと思う。中学生の皆さんに助けてもらったことは、本当に心強かったし、嬉しかった。皆さんには、あの時の中学生のような気持ちを持ち続けて、是非「カッコいい大人」になっていただきたい。



開催地より

講演を聞き、避難所で起こっていたことを具体的に理解できた。途中、会場で実際に床に横になって避難所の体験をさせてもらったことも生徒には印象的であったと思う。今日のお話は生徒の心に残ることと思う。